

蜘蛛に化けて来た淵の主 = = = 三州横山話より

滝川村の奥から流れる大荷場川という川に、瀬戸ヶ淵という淵があって、そこにはブトの類がたくさんいると言いましたが、淵に悪い主がいて、命を奪られる人が時おりあると言って、釣に行くものは稀れでした。淵の上から高く水が落ちかかっている物凄いところでした。

そこへ附近の出沢村の某というものが、釣に出かけると、その日はまた珍しい時の経つのも忘れなく水面を見る這って来て、岸に足を一巡りして、ん中頃になると見ると同じ蜘蛛がまうに足を一巡りしを、同じように幾たので、不審に思細い蜘蛛の糸が幾るので、そつとその切り株に引っ掛けていると、淵の底掛け声がしたと思そっくりもぎ取ら行ったと言います。



カワムツ(ブト)

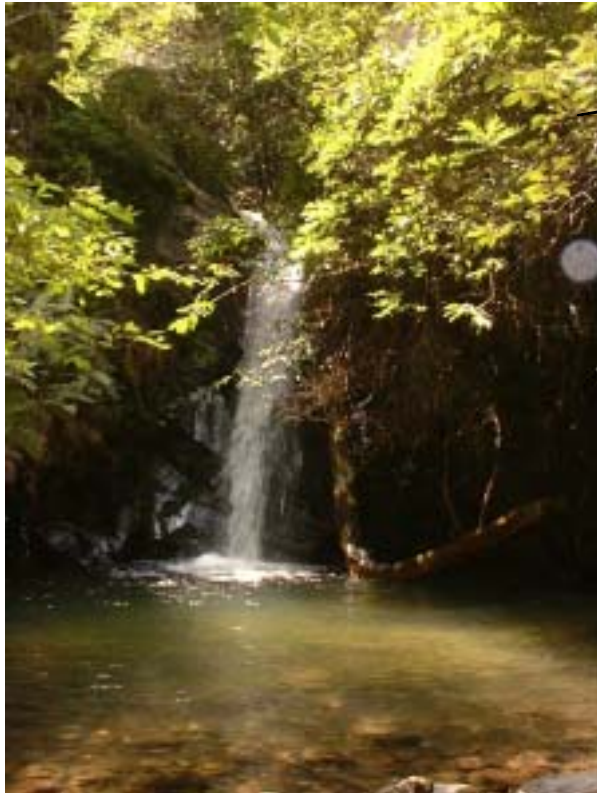
膨大な数の方言があるが、これらのすべてが石川県と愛知県を東限としている。とりもなおさず東日本には分布していなかった証だが、最近は何アユの放流に混じって関東地方などへも移入され、定着している

(この辺りでは「ハヨ」と言います。)

この話をした鈴木戸作という男の弟が、ここで釣をしていると、水面から一尺ほどはいったところに、赤いきらきらと輝くようなものを見て驚いて帰って来たと言いました。

その後、村の男が、淵の上の松を取ると言って淵へ鉈を落としたので、淵の主が川下の淵へ越したので現在は主がいないとも言います。





新緑に包まれた瀬戸淵



冬の瀬戸淵

昔は一面のツララでしたが、近年そのようなことはありません

#### 瀬戸淵

私が子供の頃は大きな淵で、四、五メートルの深さがあって、ちょっと薄気味の悪い処でした。近年、林道工事の影響で土砂が流れて来て、一時殆んど淵が埋まってしまいましたが、最近、少し回復してきたようです。言い伝えによると、「メクラ（追分）」「カイクラ（一鍬田）」「瀬戸ヶ淵」と言っこの三つの淵は底が互いに繋がっていて主が行き来をしていると言われていました。

川小僧達は、ここも遊び場にしていましたが、大荷場川の水はとても冷たくて、夏でも10分と入っていることが出来ませんでした。